



【鍋島賞（最優秀演題賞）】

五十嵐 俊

国立精神・神経医療研究センター病院

研究課題、タイトル

Real World Survey on Psychopharmacology after Electroconvulsive Therapy in Patients with Depression: EGUIDE Project

コメント

2023年5月7日から10日までカナダのモントリオールで開催されました第34回国際神経精神薬理学会 CINP World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加し、JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきました。このような名誉ある賞を頂く事ができ、大変光栄に思っております。この場を借りて御礼申し上げます。

私としては、2018年のオーストリアのウィーン大会以来2度目の参加でした。新型コロナウイルス感染症の影響からオンサイトでの開催が制限され、再びオンサイトでの開催されることで、研究者の交流の場が戻ってきたことを大変喜ばしく思っております。本大会参加を通じて、自身の研究をより広く知らせる機会を得ることができました。また、他の研究者とのディスカッションや意見交換を通じて、自身の研究に関する新たな洞察やアイデアを得ることができました。さらに、最新の研究成果や知見について深く理解を深めることができました。

更に、学会の合間の時間に、私はオールドモントリオールと呼ばれる旧市街地を散策しました。その地区はヨーロッパの雰囲気が漂い、歴史的な建物や舗装された街路が広がっていました。中でもノートルダム大聖堂は、壮麗なゴシック様式の建築物であり、美しいステンドグラスや彫刻に囲まれており、見学を堪能しました。その神聖な雰囲気と壮大な建築に大変感銘を受けました。

そして初日の夜には本賞の授賞式も行われたAsian Nightに参加しました。印象的だったのが、第35回国際神経精神薬理学会/第54回日本神経精神薬理学会/第34回日本臨床精神神経薬理学会合同年会在東京で開催されるため、錚々たる諸先輩先生方がその開催の案内が印刷された日本ながらの法被を羽織り、その開催に向けた動画の放映やアナウンスが大々的にされた点で、来年度の開催に向けた熱い想いを体感することができました。

末筆となりましたが、JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきましたことを誠に光栄に思います。ご指導ご鞭撻を賜りました皆様、及び学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。今後も研究を発展させ、より良い成果をもたらすために、学会で得た知識や経験を活かしていきたいと思っております。



種田 靖久

岐阜薬科大学薬物動態学研究室

研究課題、タイトル

The Establishment Of The Method To Differentially Identify The Isomers Of A Fentanyl Analogue, Fluorofuranylfentanyl

コメント

2023年5月7～10日にモントリオールで行われました第34回国際神経精神薬理学会（34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology）に参加いたしました。CINP2023を開催していただいた先生方ならびに運営スタッフの皆様から心から感謝いたします。今回、同会で開催されたAsian NightにおいてJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2023を受賞させていただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。初めて参加したCINPにて受賞することができ、大変嬉しく、そして光栄に思います。今後もこの領域においてより一層技術を磨き精進していこうと思っております。

今回、”The establishment of the method to differentially identify the isomers of a fentanyl analog, Fluorofuranylfentanyl”のタイトルでポスター発表の機会を頂きました。私の研究室ではこれまで乱用薬物となり得るフェンタニル類似体の代謝プロファイルの解明および分析方法の確立に取り組んできました。そして、新規フェンタニル類似体において、識別が困難である位置異性体に対して代謝プロファイルを活用した識別方法を確立しました。今回開発したフェンタニル類似体位置異性体の識別方法は、新規化合物の正確な同定に有効であることが示唆され、今後の神経精神薬理学の研究促進に有用であると考えています。また、今回は現地にて世界各国の研究者の皆様と様々なディスカッションすることができました。海外ではオピオイドクライシスが未だ問題となっている実情を感じ取ることができ、今後のオピオイド関連の研究推進に向け刺激のかつ有意義な学会となりました。

最後になりますが、今回の受賞にあたり、御指導・御鞭撻を賜りました北市清幸教授をはじめ御指導いただきました先生方、本研究に携わった研究室の皆様および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を励みにこれからも神経精神薬理領域の発展に貢献できるよう努力していきたいと思っております。今後とも御指導どうぞよろしくお願い申し上げます。

古田島 浩子

東京都医学総合研究所依存性物質プロジェクト

研究課題、タイトル

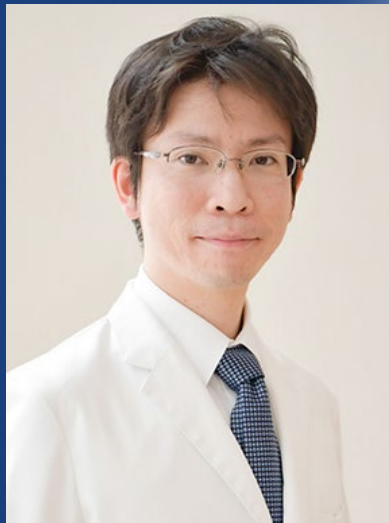
Effects of Behavioral Therapy on ASD Associated with
Tuberous Sclerosis Complex and DNA Methylation
Analysis in Mice

コメント

2023年5月7日から10日にカナダ、モントリオールにて開催された第34回国際神経精神薬理学会(34th CINP World Congress Neuropsychopharmacology; CINP2023)に参加いたしました。新型コロナウイルス感染症の世界的流行が落ち着いてきた中で、久しぶりに海外学会に参加することが叶い、多くの研究者の先生方と研究の議論やコミュニケーションが直接出来たことを大変嬉しく思いました。開催に向けてご尽力いただいた学会関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。このような貴重な学会に参加させていただき、今回JSNP Excellent Award for CINP 2023を受賞できたことを心からうれしく思います。

発表内容としては、早期から開始する行動療法がなぜ自閉スペクトラム症（自閉症）の社会性行動障害を寛解させるのか、に着目し自閉症モデルマウスを用いて解析いたしました。行動療法に見立てたペア飼育を早期から開始し、その影響を行動解析やDNAメチル化解析を行い検討いたしました。本研究より、野生型マウスと飼育した自閉症モデルマウスの社会性行動障害が改善し、そのメカニズムにDNAメチル化が寄与していることが見出されました。これらの研究結果は、自閉症の社会性行動障害の根本的な治療や病態解明の基盤となると考えています。

本研究の遂行にあたり、多くの先生方と議論を積み重ね、実験のご指導を賜りました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。最後になりますが、今回の受賞を機会に改めて研究に精進し、「社会性とは何か」という自らの研究課題を問い続けたいと思います。今後ご指導・ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



塩飽 裕紀

東京医科歯科大学精神行動医科学分野

研究課題、タイトル

Autoantibodies Against NCAM1 From Patients With Schizophrenia Cause Schizophrenia-related Behavior And Changes In Synapses In Mice

コメント

2023年5月7日－10日にカナダ・モントリオールで開催された34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加し、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2023と鍋島賞を授与していただきました。大変ありがとうございました。

受賞の対象となった演題は、統合失調症患者の約5.4%(223名中12名)の髄液・血液から、新規のシナプス自己抗体である抗NCAM1(Neural Cell Adhesion Molecule 1)抗体を発見し、その病態を解析した研究です。NCAM1はプレシナプス・ポストシナプスの両方に存在し、NCAM1同士のホモフィリックな結合によってシナプス結合を強固なものにする細胞接着分子です。抗NCAM1自己抗体の発見とともに、統合失調症患者から精製した抗NCAM1自己抗体をマウスの髄液中に投与すると、NCAM1の分子間結合を阻害し、その結果としてNCAM1の下流の分子シグナルの変化、シナプス・スパインの減少、認知機能低下やプレパルス抑制の障害など統合失調症に関連した行動変化が見られることを報告しました。患者から病態を形成し得る自己抗体が見つかったことは、除去すべき治療ターゲットとして、標準治療で十分な回復が得られない患者に対する新しい治療戦略にもつながる可能性につながる可能性があり、また抗NCAM1自己抗体はそのような治療を行うかどうかの統合失調症のサブタイプのバイオマーカーとして機能するかもしれません。

CINP2023ではたくさんの先生方と話をさせていただき、様々な研究アイデアも浮かび大変刺激になりました。また本賞を受賞させていただき、今後も身を引き締めて研究活動を進めていこうと決意を新たにいたしました。今後も、CINPと本学会で活動を続けていきたいと思っておりますので、今後ともご指導をいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。



竹内 絵理

国立精神・神経医療研究センター神経研究所遺伝子疾患治療研究部

研究課題、タイトル

Enhanced anxiety associated with brain Dp427 deficiency in a canine model of Duchenne muscular dystrophy

コメント

2023年5月7日から10日にカナダ、モントリオールで開催されました第34回国際神経精神薬理学会（34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology）に参加し、ポスター発表をいたしました。本発表に対し、日本精神神経薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP2023をいただくことができ、大変光栄に思います。選考委員の先生方および学会関係者の皆様にご場をお借りして感謝申し上げます。また、研究を遂行するにあたり多くの先生方にご指導・ご助言いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

国際神経精神薬理学会への参加は今回が初めてでしたが、様々な国の研究者と交流し、基礎から臨床に至るまで幅広い研究の動向について知ることができ大変勉強になりました。私にとっては久々のオンサイトでの国際学会参加となりましたが、画面越しでは感じられない活気ある議論が繰り広げられており、対面で交流し議論することの良さを改めて感じることができました。私はデュシェンヌ型筋ジストロフィー（DMD）の脳症状について研究を行っています。脳には長さの異なるいくつかのジストロフィン・タンパク質が発現しますが、全長型のジストロフィン・アイソフォーム（Dp427）の欠損により、どのようなメカニズムで脳症状が生じるのかについてはあまりよく知られていません。本発表では、DMD患者さんと同様の症状を示す中型サイズの疾患モデル動物である筋ジストロフィー犬を対象に、Dp427を欠損するとどのような脳症状を呈するかを評価しました。その結果、筋ジストロフィー犬は不安様行動を示し、副交感神経系の働きが低下することが明らかとなりました。今回の受賞を励みに、Dp427欠損による脳症状のメカニズムの解明を目指し、新たな治療法開発に貢献できるよう、より一層研究に邁進してまいります。

Geyao Dong

名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・附属病院
薬剤部

研究課題、タイトル

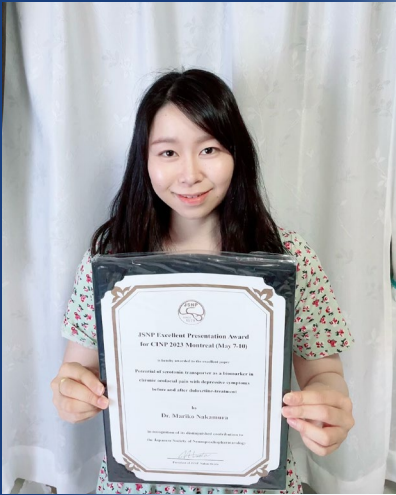
Comprehensive phosphoproteomic analysis in reelin mutant mice identified a crucial role of twinfilin 1 in spine development and actin dynamics

コメント

このたび、2023年5月7日から10日にカナダのモントリオールにおいて開催された34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2023)に参加させていただきました。CINP2023を開催していただいた先生方ならびに運営スタッフの皆様にご心から感謝いたします。今回、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP2023を受賞させていただきました、大変光栄に存じます。今後もこの領域においてにより一層技術を磨き精進していこうと思います。

私は今回の学会では、“Comprehensive Phosphoproteomic Analysis In Reelin Mutant Mice Identified A Crucial Role Of Twinfilin1 In Spine Development And Actin Dynamics”のタイトルでポスター発表させていただきました。リーリンの下流シグナル分子に焦点を当て、RELN遺伝子変異マウスの認知機能低下に関わるアクチンダイナミクスの異常な細胞内シグナルを検討しました。リーリンの下流タンパク twinfilin-1 のリン酸化レベルはシナプスの形態に影響を与えるかどうか、学習・記憶に重要なシナプス長期増強をリーリンがどうやって正に調節するかを明らかにしました。さらに、リーリンに関する生化学実験を実施し、in vivoにおける神経科学的な変化を明確にしました。

また、今回の研究および発表の遂行にあたり、多くの先生方にご指導を賜りました。そして研究室のスタッフの方々、学会関係者の方々にはいつも研究活動を支えていただいていると、この機会に改めて感じました。ご指導ご鞭撻いただいた皆様にご場を借りしまして、厚く御礼申し上げます。今回の受賞を励みとし、新たな知見を報告できるよう、今後も研究活動に誠実に取り組もうと思います。



中村 真理子

名城大学薬学部・大学院薬学研究科 病態解析学 I

研究課題、タイトル

Potential of serotonin transporter as a biomarker in chronic orofacial pain with depressive symptoms before and after duloxetine-treatment

コメント

カナダ モンテリオールのFairmont The Queen Elizabethにて2023年5月7日～10日まで開催されました第34回国際神経精神薬理学会(34th CINP World Congress Neuropsychopharmacology : CINP 2023)に参加いたしました。CINPには初めて参加しましたが、COVID-19の影響で3年間のバーチャル開催を経た悲願の対面開催が実現したこともあり、会場は大変華やかで熱気と歓喜に包まれていました。著者は「Potential of Serotonin Transporter as a Biomarker in Chronic Orofacial Pain with Depressive Symptoms Before and After Duloxetine-treatment」という演題にてポスター発表を行いました。口腔内に器質的な異常のない慢性疼痛を抱える患者の診断や臨床症状のバイオマーカーの探索と確立を目的とした研究です。

この度、光栄にもJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2023を受賞し、日々の研究成果がこのような名誉ある受賞につながり大変嬉しく思います。常日頃よりご指導ご鞭撻を賜りました指導教員および共同研究者、学会関係者の皆さまに深く御礼申し上げます。

本会は、最新の研究の発展や新しい治療法、新しい臨床ニーズや問題点について学び、世界中の研究者とコミュニケーション・協力・ネットワークを築くことをテーマにしています。世界中の神経精神薬理学に関する基礎から臨床までの最先端の研究を数多く拝聴することができました。拝聴した講演発表と議論を通し、精神疾患の病態の解明やその治療薬の開発の目的は患者の社会復帰であり、これは世界共通であると実感しました。今回の受賞を励みに、神経精神薬理学領域の実際の医療現場に還元するべく日々精進してまいります。



宮西 肇

富山大学大学院医学薬学教育部・薬物治療学研究室

研究課題、タイトル

The Contribution of N-acetyltransferase in Depressive Pathology through the Control of 5-HTergic System and GABA Contents in the Raphe Nucleus

コメント

この度、2023年5月7~10日にカナダ・モントリオールで開催されました第34回国際神経精神薬理学会(34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2023)に参加いたしました。コロナが落ち着き久しぶりに海外現地にて学会参加できるということで、とても楽しみにしておりました。モントリオールはフランス語圏ということで話が通じるか心配な面もありましたが、現地の方は英語も堪能であり、モントリオールの街並みの美しさを感じながら快適に過ごすことができました。

基礎研究を行っている私にとって、臨床研究と基礎研究の発表があるCINPはとても勉強になる機会でした。今回は、“The Contribution of N-acetyltransferase in Depressive Pathology through the Control of 5-HTergic System and GABA Contents in the Raphe Nucleus.”というタイトルでポスター発表させていただきました。背側線条体と背側縫線核間におけるセロトニンとGABAの神経ネットワークのストレス感受性に対する機能とそのメカニズムの解明を目的に研究を行っているところであります。会場では、多くの先生方とディスカッションさせていただき貴重なご意見、有益な情報を多数いただきとても有意義な時間を過ごせたと感じております。またAsian NightやPresidential ReceptionではCINP主要メンバーや著名な研究者の方々ともお話しする機会があり、非常に素晴らしい交流ができたのではないかと感じております。

学会の期間中は天候に恵まれたこともあり、合間の時間には旧市街を散歩したり、ノートルダム大聖堂を訪問するなど、モントリオールを十分に堪能することができました。

最後になりますが、今回の発表にて、JSNP Excellent Award for CINP 2022を受賞させて頂き大変光栄に思います。受賞にあたり、ご指導頂きました先生方、また学会関係者の皆様にご場を借りて深く御礼申し上げます。この受賞を糧に日々精進し、神経精神薬理領域の発展に貢献できるよう努力していきたいと思っておりますので今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

彌富 泰佑

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

研究課題、タイトル

Regional AMPA Receptor Density Determines Functional Connectivity

コメント

この度は、2023年5月に開催された第34回国際神経精神薬理学会（34th CINP World Congress）での発表に対して、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2023に選出頂き、大変光栄に存じます。

2023年5月7日～10日にカナダのモントリオールで行われた34th CINP World Congressに参加して参りました。海外の学会の現地参加は3年ぶりでもあり、様々な質疑応答・ディスカッションを行わせて頂いたことを含め、刺激を受けながら、充実した期間を過ごすことができました。

今回は“Regional AMPA Receptor Density Determines Functional Connectivity”のタイトルで口頭発表の機会を頂きました。私はこれまで、精神科医として脳画像研究と薬理疫学に関心を持ち、脳画像研究では特にAMPA受容体PETとfunctional MRIに関する研究に中心的に携わっています。今回はワーキングメモリーの指標となる神経心理学的テスト（LNS）のスコアに相関するPET領域を中心に解析を行い、AMPA受容体密度がスコアだけでなくFunctional connectivityの強さをも規定する領域を見出し、そのネットワークを同定しました。現在は脳領域全体におけるAMPA受容体密度とFunctional connectivityの関連性についての検討を進めております。今回の研究発表を精神疾患の診断・治療に繋げていけるよう、これからも邁進していく所存です。

最後になりますが、今回の受賞にあたり、ご指導を頂いた先生方にこの場を借りて心より感謝を申し上げます。また、選考委員の先生方及び学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。神経精神薬理学分野の発展に貢献できるよう精進して参りますので、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



吉川 貴子

東北大学 大学院医学系研究科 発生発達神経科学分野

研究課題、タイトル

Sex differences in regulation of FMRP mRNA targets during brain developme

コメント

34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacologyにてポスター発表を行い、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2023を受賞いたしました。この名誉ある賞を賜りましたこと、ご指導いただき先生方、研究室員、ならびに学会関係者に厚く御礼申し上げます。

私は、神経発達障害の性差を生み出す脳発生プログラムの解明を目指した研究に取り組んでいます。神経発達障害は罹患率や病態の性差が知られており、性差に沿った診断・治療プロトコルの開発が早急に求められています。その性差を生み出すメカニズムは分かっていない現状です。神経発達障害の原因として、脳がつくられる胎生期に、脳発生プログラムに破綻が生じ、その後の脳構築および神経機能に異常をきたすことが知られています。脳は構造的・機能的に性差を示すことから、脳がつくられる胎生期のうちに既に性差を生むプログラムが備わっていると予想し、これまでに雌雄のマウス胎仔脳を用いて脳発生関連遺伝子発現量の雌雄差を検出してきました。本研究では、遺伝性神経発達障害で、罹患率および病態に性差が認められる脆弱X症候群に着目し、脆弱X症候群モデル（Fmr1ノックアウトマウス）を用いて、野生型およびFmr1ノックアウトマウスの雌雄の脳原基を対象としたRNA-seq解析により、Fmr1変異によるmRNA発現量の変化が雌雄で異なることを見いだしました。今後、同定した分子群の脳発生における機能解析を行い、神経発達障害の性差を生み出す脳発生プログラムの解明に向けてさらに研究を進めていきます。

神経精神薬理学分野の学会としましては、2021年の7th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacologyにオンライン参加して以来の参加となりました。このたび、カナダ・モントリオールにてオンサイトで参加させていただき、神経・精神病態の最先端研究に携わる研究者と活発で有意義な議論をすることができました。今後も積極的に成果発表を行い、神経精神薬理学研究分野の発展に貢献できるように精進してまいります。改めまして、このような素晴らしい賞をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。